

ＪＡめむろ青年部・女性部 海外視察研修

第 22 回 海外視察研修報告書

令和 5 年 11 月 25 日～12 月 2 日

ＪＡめむろ青年部・女性部

はじめに

第22回 JAめむろ青年部・女性部 海外視察研修
団長 鈴木 賢



2年前はコロナ禍で延期せざるを得なかった海外視察研修、今回の研修は青年部6名、女性部3名参加のもと視察先の選定をおこないました。研修の目的として、芽室町でも確実に進む経営者の高齢化、後継者不足および1戸あたりの経営面積の増加による効率化が叫ばれ、ウクライナ問題を発端とした国内外の情勢の悪化、コロナ禍でより変化した消費行動など様々な問題や課題が出てきています。農業者として、そして農業経営の一角を担う我々としても先行きが見えず、従来の変化に対応できる柔軟性を持つ必要性や農業の見える化に加え、農業DXによる生産から流通までのデータ化、有機栽培、温暖化による適温作物の変化や品目数の拡大など多角的な問題や課題が山積されています。そのため、生産者として芽室農業へ寄与できるよう知見を広げることを目的として、気象条件が近く、なおかつ11月という時期に作付作業やほ場管理がおこなわれている南半球のオーストラリアを視察先に選定し、団員の要望が多かった農場や加工施設など11月25日から12月2日までの8日間に渡りタスマニア島、メルボルン近郊を視察して参りました。

タスマニア島では、民間による馬鈴薯の種馬鈴薯管理会社チェリーヒル、種馬鈴薯生産農家であるグレン・カー農場、果実酒を製造しているスプレイトンサイダーの視察をおこないました。日本における5月下旬でしたが、国内でもより南極に近い冷涼な気候のタスマニア島、美瑛町のように広大で丘陵が多いほ場条件でなおかつ視察した地域のほとんどが灌漑設備を有した農業で、海に近く内陸でもほぼ赤土であったのがとても印象深かったです。その中でも規模集約や機械の大型化、ほ場条件を生かした簡素化された作付けほ場を見て移動時間を含め圧倒される場面が多々ありました。

メルボルン近郊ではクイーンビクトリアマーケット、環境保全団体セレスと実践農園、ヤラバレーワイナリーの視察をおこないました。それぞれ歴史が古く見応えがあり、生産者と消費者の両面から刺激を得ることができました。

今回の研修で我々団員全員が芽室町から国外へ足を向けることにより得られた知識や風土など数多くの刺激に触れられたことは今後の営農につながる貴重な体験であり、参加者9名全員が無事に帰町し海外視察研修を終えたことをここに報告いたします。

最後に、この度の研修に際し多大なるご理解、ご協力をいただいたJAめむろ並びに青年部、女性部、そして各関係機関の皆様に心から感謝を申し上げますとともに、今後多くの青年部員、女性部員が海外視察研修に積極的に参加されますことに期待をいたします。

目 次

はじめに 第22回 JAめむろ青年部・女性部 海外視察研修団 団長 鈴木 賢	1
参加者名簿	4
集合写真	5
行程表	6
地 図	7
<視察研修先>	
1. チェリーヒル	8
2. グレン・カー農場	10
3. スプレイトンサイダー	12
4. クイーンビクトリアマーケット	13
5. セレス	14
6. ヤラバレーワイナリー	16
<団員寄稿>	
鈴木 賢	17
伊藤 健太	19
小林真奈美	21
梶澤 初太	23
竹内 章	25
山口 祐佳	27
奥野 早苗	29
久保 春樹	30
口田 諒	32
旅を終えて	34
編集後記	38

第 22 回 J A めむろ青年部・女性部海外視察研修参加者名簿

団長：鈴木 賢

副団長：伊藤 健太、小林 真奈美

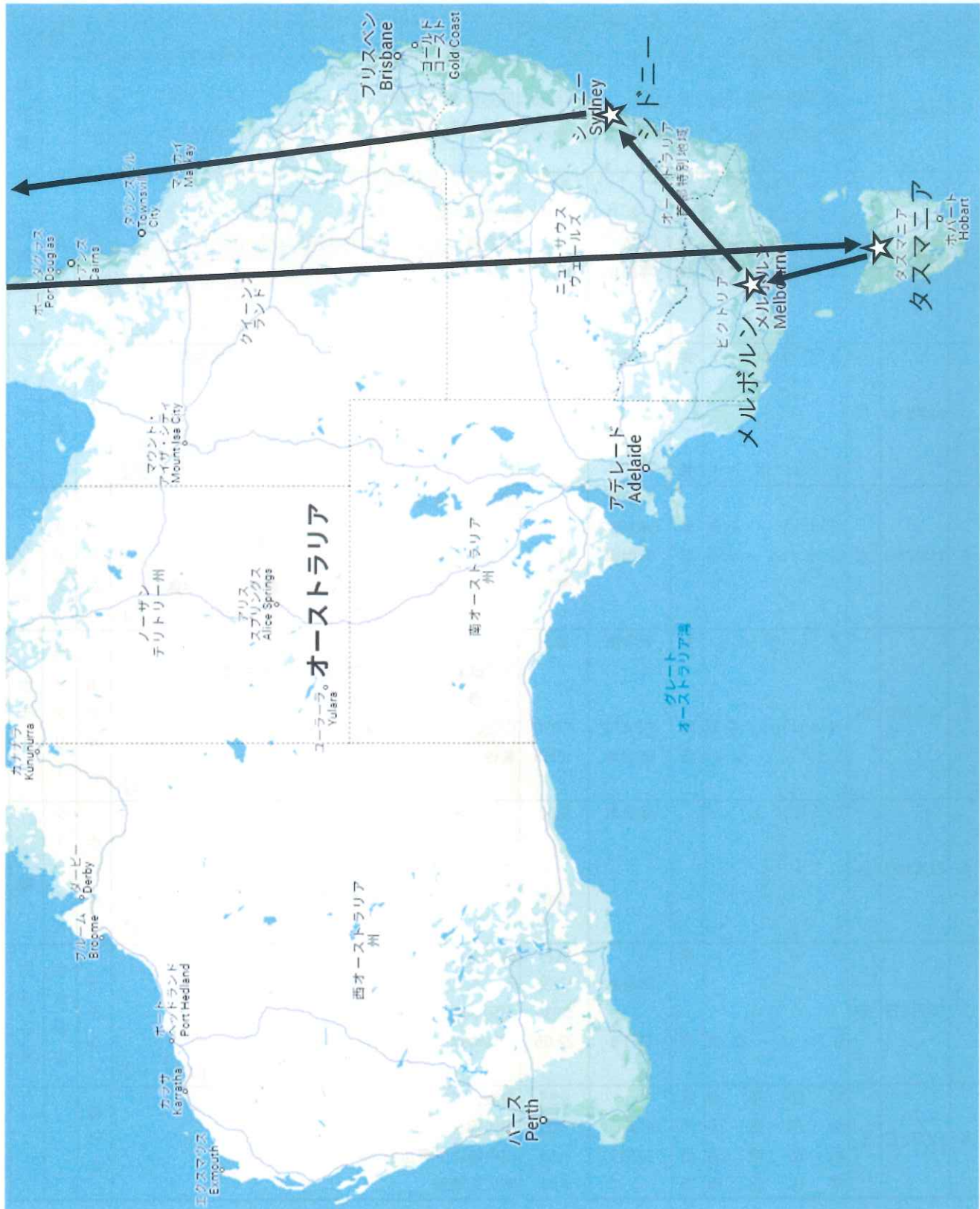
氏名	農事組合	担当
鈴木 賢	中美生	団長
伊藤 健太	新美生	副団長
小林 真奈美	弥生	副団長
梶澤 初太	北上美生	渉外（部会長）
竹内 章	報国	広報（部会長）
山口 祐佳	報国	厚生（部会長）
奥野 早苗	坂の上	渉外
久保 春樹	明盛	広報
口田 諒	毛根	広報



行程表

日次	日付	曜日	都市名	発着	交通機関	現地時間	行程	朝	昼	夕
1	11月25日	土	帯広空港 羽田空港 羽田空港	発着 発着 発着	JL572 QF80	13:05 14:50 21:05	国内線にて、羽田空港へ 国際線ターミナルへ移動 出国手続き後、オーストラリアのメルボルンへ 【機内泊】	-	-	機内食
2	11月26日	日	メルボルン空港 メルボルン空港 デボンポート空港	着 発着 着	QF2055 専用車	9:30 12:10 13:30	着後、入国手続き 国内線へ乗り継ぎ 国内線にてタスマニアのデボンポートへ 着後、昼食と市内見学へ 昼食はベリーファームにて 【デボンポート泊】	ホテル	洋食	肉料理
3	11月27日	月	デボンポート デボンポート	発着	専用車	午前 午後	終日タスマニアのデボンポート近郊農業視察 ・種芋貯蔵施設Cherry Hill Coolstores ・馬鈴薯生産者視察Glenn Carr ・サイダー貯蔵施設（シードル）Spreyton Cider 【デボンポート泊】	ホテル	洋食	シーフード
4	11月28日	火	デボンポート空港 メルボルン空港	発着	専用車 QF2052 専用車	朝 10:10 11:35 午後	朝食後、空港へ 午前、国内線にてメルボルンへ 着後、昼食 ・クイーンビクトリアマーケット視察（月・水休み） 【メルボルン泊】	ホテル	イタリアン	ステーキ
5	11月29日	水	メルボルン メルボルン空港 シドニー空港	発着 発着	専用車 QF474 専用車	終日 17:30 18:55	メルボルン近郊視察 ・CERES（持続可能な暮らしを目指す） ・ヤラバレーワイナリー視察 夕刻、国内線にてシドニーへ 着後、ホテルへ 【シドニー泊】	ホテル	ワイナリー	ホテル
6	11月30日	木	シドニー シドニー		専用車	9:00 15:00	シドニー市内自主研修 ロックス地区等 市内にて昼食 ホテル到着後、夕食まで自由行動 【シドニー泊】	ホテル	シーフード	中華
7	12月1日	金	シドニー シドニー空港	発着	専用車 QF25	終日 17:30 18:30 22:05	終日各自自由行動 ホテルへ集合後、空港へ 出国手続き後（3時間前） 帰国の途へ 【機内泊】	ホテル	各自昼食	空港各自
8	12月2日	土	羽田空港 羽田空港 羽田空港 帯広空港	着 発着 発着 着	シャトルバス JL573	5:55 7:00 7:55 9:25	着後、入国手続き 国内線ターミナルへ移動 国内線にて帯広空港へ 帯広空港着	機内食	-	-

地図



視察研修先

1. CHERRY HILL (チェリーヒル)

11月27日、タスマニア島での研修1か所目はデボンポート市内から車で40分ほどの郊外にあるCHERRY HILLへ行きました。

CHERRY HILLは1990年に営業を開始した種馬鈴薯の管理会社です。



設立当初は小さな会社でしたが、現在は9名の従業員と繁忙期では20名の季節労働者を動員して種馬鈴薯を扱っています。

視察当日は、CHERRY HILLのスタッフの他に、農家に生産指導などをするアグロニストの方や馬鈴薯の加工会社であるSimplotのスタッフからお話をお聞きすることができました。

この会社の主な業務は種馬鈴薯の買い取りから始まり、種馬鈴薯選別・カット・消毒・温度管理などをおこなっており、80戸の農家から約45,000tを引き取ります。

まず、受け入れの段階で厳正な選別をおこないます。この理由は質の高い種馬鈴薯の供給はもとより、管理段階での腐敗などの責任の所在をはっきりするためだそうです。選別された馬鈴薯は大小さまざまで2・4・6切りに分けられ、規格外の小玉サイズは家畜の餌になり、大きいものは加工用に回されます。コンテナの札には「どこで誰がいつ生産したか」などすぐわかるようにデータ化がしっかりされていました。種馬鈴薯の切断作業は播種の6か月前におこなう「プリカット」と播種直前におこなう「スプリングカット」があり、「プリカット」が大半を占めます。切断して6か月经った種馬鈴薯を触らせてもらいましたが、切断面がしっかりしており、スタッフの方は「切断面が乾いていないと健全な馬鈴薯は育たない。」とおっしゃっていました。切断作業は専門の大型機械で、1日に約120t処理します。衛生管理に関しても機械を使い終わったら、オフシーズンに機械を解体して整備・消毒を徹底していました。温度管理では外気温に合わせて馬鈴薯の芯温調整をしており、播種をする農家も播種する当日にその日

の播種量だけを引き取りに来るなど、メーカーや農家間での密なやり取りを垣間見ることができました。

また、今回の視察では馬鈴薯の加工会社である Simplot 社のお話を伺うことができました。

Simplot 社はマクドナルドなど様々な出荷先を抱える会社です。ここではただ買い取りをするだけでなく、農家ごとに生産段階での管理・時間当たりの収穫効率をデータ化して農家にフィードバックしています。お互いに力を合わせてより質・量を上げていこうとする現地の方々の姿勢を感じ、芽室町における馬鈴薯生産にも活かせるのではないかと可能性を感じました。



タグで管理



処理された種馬鈴薯

2. グレン・カー農場

11月27日の午後、タスマニアで主に馬鈴薯を生産しているグレン・カー氏の農場へ視察に行きました。農場近辺は思っていたより丘陵が多く、北海道では美瑛に近いようなイメージの場所でした。



グレン・カー農場は年間約 20,000 t の馬鈴薯を収穫するタスマニア北西部を代表する農家で、農地面積は 180ha で馬鈴薯は Simplot への加工向けと種馬鈴薯の生産もおこなっています。また、酪農も兼業しており、乳牛 300 頭の飼育もおこなっています。

まず初めに、ほ場主のグレン氏から軽く農場説明を受けた後、機械倉庫や搾乳施設を中心に視察をおこないました。タスマニアでは珍しいまとまった降雨があった後だったので、ほ場の方は残念ながら見られませんでした。タスマニアは雨が少なく、基本的には散水機を動かして干ばつに備えているので、グレン氏は恵みの雨で仕事が楽になると喜んでいました。倉庫の中は主に馬鈴薯関連の機械が並んでおり、Grimme 社製ハーベスターが 4 台並んでいる様は圧巻でした。また、植え付け機が播き付けと作条施肥、培土まで同時におこなえるように改造されているのが印象的でした。施肥タンクの中には肥料が入ったままで少し驚きましたが、乾燥している地域なので日本と違いそのままでも問題ないのかと思いました。ほ場に設置してある散水機を動かすための動力として、トラクターを改造した機械を使っているようで独特で珍しかったです。

ひと通り見学が終わった後、最初に説明を受けた車庫に戻り、軽い食事を交えた交流をおこないました。グレン氏の妻ジャミィ夫人も交えての交流会はとても楽しく有意義な時間となりました。特にジャミィ夫人はとてもフレンドリーで「奥さんを大事にすることが良い経営に繋がる」という考えを話していて、日本と同じような考え方だなと思いました。また、オーストラリアでは経営を子供に継承していくという考えは基本的になく、経営を退く際は会社を売買するリリースで貸し出すなどの形が多いとのことで、そこは日本と大きく異なると思いました。

全体を通して日本と異なる大規模経営の実態を学ぶことができた研修になったと思います。特に経営継承の考え方など、今後私たちも参考にしていかなければいけないと感じました。また、グレン氏は本当に友好的で帰国後も連絡をとれるよう図っていただきたり、農場の作業着を送ってくれる話もしていただきたりしたのがとても嬉しかったです。



3. スプレイトンサイダー

11月27日、グレン・カー農場視察後、スプレイトンサイダーの施設でリンゴ栽培とサイダー醸造の視察、テイスティングをおこないました。スプレイトンサイダーはオーストラリアでは有名な飲み物で、サイダーと言ってもジュースでは無



く果実酒で、お酒の種類の1つでした。1908年から続くタスマニア北西部の代表的なリンゴ農園から始まり、その後4世代にわたりタスマニアを始め世界の人々のために最高品質のリンゴを育て、生食やリンゴジュースの製造をして販売していました。2011年に、前から悩んでいたサイダー造りの意思を固め、その翌年の2012年より生産を開始しました。現在はタスマニア産リンゴとフレッシュアップルジュースの工場として稼働する一面の他に、オーストラリアでも数少ない栽培、醸造、出荷の行程をおこなうサイダー生産者の本拠地としても動いていました。また、スプレイトンサイダーより発売されている「キングストン・ブラック・サイダー」は2021年にオーストラリアンサイダーアワードで受賞する程の人気ぶりとなりました。

視察は初めに、施設内にあるリンゴを栽培している農園へ行き、受賞に輝いたサイダーに使われている品種のキングストン・ブラックやデザートリンゴと呼ばれるスターマー・ビビンなどのリンゴを見学しました。その後、醸造施設に移動しリンゴが加工されサイダーに仕上がるまでの過程を見学後、受賞したキングストン・ブラックのサイダーを始め6種類をテイスティングしました。品種によって味が違うのは当然ですが、ここまで風味や飲みやすさに違いがあるのかと驚きました。テイスティングの中には「ジンジャービール」というショウガの風味をしっかりと味わいつつスッキリと飲めるサイダーもありました。

現地のクラフトサイダーを飲んで異国の食文化に触れることができ、古くから馴染みのある果物が様々な形で人々の口に触れ、今も愛され続けているのを感じ、私たちも品目は違えども消費者の皆様に親しまれるような作物を作っていきたいと思いました。

4. クイーンビクトリアマーケット

11月28日に視察したメルボルンのクイーンビクトリアマーケットは、南半球最大の7haもある広大な野外マーケットです。メルボルンの街を走るトラム（市電）の無料乗車圏内にあるため、観光客にも大人気のスポットです。



歴史は古く1878年にオープンし、メルボルンの人々には、ビッグマーケットと呼ばれ親しまれています。ビクトリア朝の遺産登録にも記載され、マーケットを囲む外壁には、マーケットの歴史が記載され、19世紀の建物は今もそのまま使われているそうです。この場所は元々、国の公式なお墓があった場所で、街の開拓と同時にマーケットとして生まれ変わり今では庶民の台所として賑わっています。

屋内エリアでは、主に精肉、鮮魚、乳製品、美味しそうな焼きたてのパンやチーズ、ディップなど要冷蔵の物や惣菜を扱う店がずらりと並び、その光景は「ザ・海外」といったスタイルでどこも見逃したくないお店ばかりでした。中でも精肉店のオーギービーフの塊肉、鶏のトサカや、生々しい爪のついた足には感嘆の声をあげました。

屋外エリアでは、主に新鮮な野菜や果物が量り売りで購入できます。ビクトリア州にある色々なファームや個人の畑から採れた新鮮な野菜が多く並び、あちらこちらで買い物客の活気に包まれていました。

食品だけでなく衣類や民芸品、アクセサリーに本などお土産を扱う店も多く、短い時間ではありましたがメルボルンの食と文化を少しでも知ることができ楽しめました。



5. セレス

11月29日の午前中にメルボルン近郊にある Ceres に視察に行きました。Ceres とは環境保護の啓蒙活動をしている NPO 団体で「Centre for Education & Research in Environmental Strategies」（環境戦略のための教育と研究センター）の略で Ceres という名前になっているそうです。また、このほかにもローマ神話の実り女神「セレス」からもとられています。



施設に到着すると、初めに Ceres のジョナサン氏に迎え入れられ、Ceres の成り立ちや施設概要を説明してもらいました。Ceres の活動している土地は、100年前は鉱山で坑道の穴がゴミ捨て場として使われていたそうです。その後、ゴミ捨て場の上に住民たちが公園を作り、ゴミを撤去して客土することで今の原型ができたそうです。そして、約40年前に化学性の肥料、農薬、殺虫剤などを使わずにオーガニック中心に活動することを決め、現在は非営利団体として一般市民にオーガニック素材の販売や地域住民に生活の場を提供しています。

ひと通りジョナサン氏のお話を聞いた後、実際に施設内を視察させていただきました。施設は蔦カーテンによる日よけや、貴重な水を利用できるよう雨どいの下に貯水設備を設けるなど各所に環境への配慮が感じられました。また、施設内にはオーガニック食材を提供しているカフェレストランやオーガニック製品を購入できる直売所などもありました。Ceres の人たちはオーストラリア先住民の方々をとてとても尊敬しており、それはレストランの名前（wurundjeri）にも表れています。その他にも、施設内の農園を近隣住民に貸し出ししたり、不要になった自転車を修理して自転車を買えない人に無償で提供したりするような活動もおこなっているそうです。

「環境戦略のための教育と研究センター」の名前の通り、Ceres の農園内は地域の子供達への教育の場としても活用されていて、鳥の木箱を設置し鳥の子育てやどのような物を食べているかなどの生態調査をおこなうことで、学びの場としても活躍しています。実際に施設内は生き物がたくさん住み着いており、その中でも特に印象に残ったのは、「カタツムリもオーガニック素材として食べら

れる」という冗談をジョナサン氏から言われ、その場はとても面白い雰囲気となりました。

視察全体を通じて環境への配慮の大切さや、地域の方々との交流の大事さを学べたと思います。ゴミ捨て場がこんなに自然豊かな場所になるには相当な努力があったのだらうと感じ、私たちも今の農業を維持していく上でその姿勢を見習っていきたいと思いました。



6. ヤラバレーワイナリー

11月29日に視察したヤラバレーは、広範な丘陵地帯にブドウ畑が連なるオーストラリアを代表するワイン産地で、メルボルンから60 kmほど離れたところにあるビクトリア州で最も人気の高い観光地のひとつです。美しい高原の中に位置し、半径10 kmの範囲に80以上のワイナリーが点在しています。



10月～11月が春でブドウの花が咲き、12月～2月は夏でブドウの生育期となり、果糖が上がり酸味は下がります。そして、夏の日差しが当たるように枝を剪定します。3月は秋で収穫となります。冷涼な気候と良質な土壌から出来るブドウを使ったワインの質は高く評価されており、ワインテイスティングや、付属のレストラン、カフェを目当てに観光客や多くのローカルが訪れるようです。

今回は、三大ワイナリーのひとつである Rochford を訪れ、ジョンソン氏による説明を聞きながら試飲を楽しみました。

- ・白 ピノ・ノワール 2023 若いワインでスパイシーなタイ料理にあう
- ・白 シャルドネ 2019 酸味がありお寿司やお刺身にあう
- ・ロゼ 2023 赤ブドウから作られ軽いランチにあう
- ・赤 ピノ・ノワール 2022 チキン料理やチェダーチーズにあう

ワイン4種類を試飲後レストランに移動して、のどかで美しいブドウ畑の風景を眺めワインを飲みながらランチをとりました。デザートもワインとの相性がよく満足でした。その後ショップで雑貨を見たり、お土産のワインを選んだり楽しい時間を過ごすことが出来ました。



団員寄稿

海外視察研修を終えて

鈴木 賢

初めに第22回JAめむろ青年部・女性部海外視察研修参加させていただきご協力いただいたJAめむろをはじめ青年部・女性部、その各事務局、企画・同行していただいた農協観光笠松エリア長、そして各関係機関の皆様に心から感謝いたします。

今回、最終的に9名の参加というコンパクトな視察団になりましたが、団長という大役を任せられました。参加者唯一の酪農家という「畑違い」という言葉がまさにピッタリと当てはまる私だけに、今までの団長と一味違った緊張感を持って会議から視察まで過ごすこととなりましたが、副団長を初め団員それぞれに数多くの場面で助けられながら視察を終えられたことに安堵しております。

11月25日の帯広空港からタスマニア島デボンポートへ丸1日かけて移動とハードな始まりではありましたが、現地に到着してから移動の車中の景色に疲れを忘れ、感嘆の声が漏れ続けた時間を昨日のここのように思い出します。北海道自体まだ100年程度の歴史ということを踏まえ、温暖化の進んだオーストラリア農業から何か学ぶべき視点はあるのかという不安も個人的にはありましたが、規模拡大と習熟度が見られた点は大きな収穫でした。例としてタスマニア農業をあげると、タスマニア島内でも穀物地帯と畜産地帯が南北で分かれています。どちらも北海道農業と歴史的に大差はありません。しかし、オーストラリア政府として特段農業への補助金があるわけではなく、個々の経営努力により生き残ってきた点、後継の仕組みが移譲ではなく原則買取、親子間でも買取という点がより規模拡大を早めたと推察しました。種馬铃薯生産農家のグレン・カー



氏の「私たちは守られてないからね」と笑いながらおっしゃいた一言が印象に残っています。

機械投資も積極的で、日本で見られる大型機械も先行して導入されている印象でした。しかし、それらも数年程度の時間差しかないので日本とハードの差は感じていません。前述のチェリーヒルのような民間の専門会社が機能していることもあり、農家がより生産に集中できる環境が出来ています。30 年は進んでいるかなと思いますが、日本農業も漏れなくデータ化デジタル化の波が押し寄せていることを考えると、農家戸数は減少しても規模拡大と習熟は差が 30 年あったとしても 30 年もかからないで進むのではと感じました。

その他内容は研修報告と重複する部分があるので割愛させていただきますが、どの視察先も実際に目と肌で感じられた、実のある研修だったと実感しています。自分自身頼りない団長で不甲斐なく、団員の皆さんにはお詫びと感謝の念しかありませんが、短い期間で親睦を深められ、あっという間、むしろ西海岸の小麦地帯はこうだとか現地の方の話を聞くと 5 日間では足りないくらい内容の濃い日程でした。

研修を終えて、行程や立案にいい点や問題点は青年部・女性部で共有し次回以降より良い海外視察研修となり、今後より多くの方々が参加していただけますことを切に願っております。本当にお疲れ様でした。感謝！

海外視察研修を終えて

伊藤健太

まず初めに、2023 年度 J A めむろ 青年部・女性部 海外視察研修を無事終えたことにあたり、J A めむろ・芽室町役場・農協観光をはじめ関係各所に重ねてお礼申し上げます。

さて、今回の海外視察研修ですが、自分は副団長として参加させていただきました。ですが、正直なところ就農してから3年と他の青年部員と比べても経験や知識も浅く未熟であることは承知の上ではありましたが、不安がなかったかといえば嘘になるかと思います。もちろん、世界規模での農業文化に触れることによって今後の営農生活の視野を広げることも目的



でした。ですが、近年では世界規模の感染症による行動制限やウクライナへの侵攻など世界情勢が不安定の中で海外視察研修に参加できるチャンスがあるだけでも幸せなことであり後悔はしたくないので参加をさせていただきました。

視察先は会議を重ねた結果オーストラリアとなり、理由としてはヨーロッパ地方が今までは多く、これから夏季になり営農している作物が北海道と近いものがあるからと主な農業研修はタスマニア島のデボンポートとなりました。個人的には種馬鈴薯の管理会社・生産者・加工会社との関係性がすごく刺激になり、「みんなプロフェッショナルな仕事をすれば何も問題はない」問題が起きたときはどうするのかと聞いたときに「問題が起きないように密に連絡を取り合い、コミュニケーションを取っている」と皆が口をそろえていった際に、補助も支援もない中で一次産業を確立し、一農家の自営業ではなく農業者としての覚悟と取り組む姿勢が垣間見えたのが印象的でした。もちろん、文化も言葉も気候も違う外国の全てを芽室での営農に全てが生きてくるものではありません。経営権がある人もいれば、酪農家の人や大規模農場の人でもいれば新人農家もいる。しかし、海外視察研修の素晴らしい所は各々おかれている立場や状況が違えど、学ぶ姿勢があれば見て聴いて、感じて考えることが直接的な刺激となって体験できることだと思います。即効性があるものが少ないかもしれない。規模が違い

すぎて参考にならない。そうではなく、違う意見や経験を自分の中で理解しようとし、思考することが今後の芽室町ひいては日本の農業の発展に大きく貢献していくのではないのでしょうか。

「みんなでコミュニケーションをとってプロフェッショナルな仕事を」これはあくまで皆がまとまって一つのことをではなく「一つの目標にむかってコミュニケーションとりながらプロフェッショナルな仕事を」では大きく違います。偉そうなことを言っておりますが、前文にも書いた通りペーパー素人です。営農においてこの思考は全て間違えているかもしれません。ですが、海外視察研修とはそれほど若い人にとっては刺激となり、良いものだとは今回参加させていただいて強く思います。年々人数が減ってきてはいますが、海外視察研修は今後も必要だと思いますので各関係機関様におかれましてはよろしくお願いいたします。

結びとなりますが経験と学び、楽しい海外視察研修は一緒に行ってくれる仲間がいてこそ意味があると思います。その場を共有して一緒に話せるから気づくこともあります。ですので、このような活動ができる青年部活動に感謝をしながら皆さんも活動していきましょう。

海外研修を終えて

小林 真奈美

今回、海外農業視察研修に参加させていただき、オーストラリア・タスマニア島に11月25日～12月2日の日程で視察研修へ行ってきました。

タスマニア島の11月下旬は平均22℃程で雨量が少なく比較的涼しいといった印象です。除虫菊やポピーを多く見ることができます。

タスマニア島の視察先、チェリーヒル・クールストアは冷蔵保管・選別を含めながら年間15,000tの種馬鈴薯を取り扱っている種馬鈴薯貯蔵施設です。種馬鈴薯のサイズ選別、消毒、切断、貯蔵、引き渡しをしています。タスマニアの専門会社では、種馬鈴薯のプレカットという技術が定着していて、事前に切断することを意味し、切断面のコルク化がその後のメリットとして重要になってくるというお話でした。私たちが行っている種馬鈴薯を切りながら植えていくスタイルは、現地の方には信じられないというお話で、種馬鈴薯管理から植え付けの過程、規模など様々な違いを知り、場所、気候の違いはあってもそれぞれの特性を活かしていければと思いました。また、馬鈴薯のコンテナに木箱を使用していて、修理しながら使い続けていくエコな取り組みだと思いました。

その後、グレン・カー氏を代表とする年間20,000tの馬鈴薯を収穫する生産者への視察へ向かいました。面積は180haで気候、環境は北海道に似ています。加工工場向けの種馬鈴薯の生産をしていて、大型トラクターや機械がずらりと並んでいました。訪問した前日に80mmの雨が降り、雨量の少ないタスマニアにとっては恵みの雨とおっしゃっていました。あちこちの畑では、灌漑設備を見ることが出来ました。グレン・カー氏の農場に、8年前に主人が訪問して、その話をすることもできました。ご夫妻とも気さくに対応していただき短い時間ではありましたが、とても素敵なひと時でした。

タスマニア、メルボルン、シドニーで素敵な景色と食事を堪能し、楽しい思い出になりました。今回一緒に過ごした参加者の皆さんのおかげで楽しく、充実し



た視察研修になりました。そしていつも見守っていただきました青年部の皆さん、大変お世話になりました。最後に、多くのご理解とご協力をいただきましたＪＡめむろ並びに芽室町役場、青年部、女性部、事務局、快く送り出してくれた家族に心より感謝申し上げまして、研修報告といたします。共に参加された皆様と過ごせた時間はとても良い思い出です。ありがとうございました。

海外視察研修を終えて

梶澤 初太

まず初めに、今回の海外視察研修に参加させていただくにあたり、J A めむろ並びに芽室町役場や各関係機関の皆様にはご理解と多くのご協力をいただき誠にありがとうございました。

僕が今回の海外視察に参加した理由は、農業の見分を広げるだけではなく、海外の文化や価値観に触れることで物事の捉え方の多様化ができたらと考えたからです。

視察の最初に訪れたのが、オーストラリア大陸の南東にあるタスマニア島でした。島の面積は北海道の 80%ほどで、農業生産額が州の GDP の約 10%を占める農業地帯です。年間降雨水量が少なく慢性的な干ばつの地域であるため、巨大な灌漑設備を各農場が保有しており、生育に合わせて徹底した水の管理をおこなっていました。また、栽培の過程で加工会社・生産者・だけでなくアグロニストといわれる栽培指導をおこなう専門家や管理会社など様々な立場の人々が協力しあい、質の良い生産を目指していました。

「各関係機関が密にコミュニケーションをとることが大切なんだ。」

これはアグロニストの方がおっしゃっていた言葉です。当たり前のことですがとても大切で農業情勢が大変な今だからこそ必要なことだと感じました。オーストラリアの農家は補助金や交付金という制度がなく、各農場が徹底したコスト管理をしていました。取引価格自体が高いですが、それとともに資材費や人件費もとても高いので、土壌診断を用いた適切な施肥や仕事上のオペレーションに対して正しい人員配置をするなど各所での経営努力やシビアさが垣間見えました。違う国だとしても、見習うべき考え方や技術を目の当たりにして考えさせられるとともに、今からでも取り組める学び多いものになりました。

また、農業分野だけではなく、地域の特性を生かした文化構成にも感銘を受けました。今回視察した都市はシドニー・メルボルン・デボンポートで、その中でもデボンポートは人口が 2.5 万人強と比較的芽室町に近い地域でした。そこでは



サイクリングロードを整備してあり、現地住民や観光客がサイクリングやマラソンを楽しみ、途中にある農村レストランやショップに立ち寄るなど、豊かな大自然を生かした文化の形成また地域の付加価値の上げ方をしていました。そこには地域創生のヒントがあるように感じました。ホームページやYouTubeなどでいくらでも情報を手に入れる現在ですが、実際に現地へ行って五感で学べることができたので実りある研修になったと共に、今後の営農に生かしていきたいと思います。

海外視察研修を終えて

竹内 章

今回私たちは、11月25日から12月2日の日程で海外視察研修に参加しました。行先はオーストラリアのタスマニア、メルボルン、シドニーの3都市で計6か所の視察をおこないました。

まず、私が今回の視察研修に参加したいと思った理由として、今後経営者として営農していく際の良い経験になると思ったからです。また、親が比較的高齢になってきて今回を逃すと家の仕事などで参加が厳しくなりタイミングが良かったことも挙げられます。



今回の海外視察研修でまず感じたことは、自分の英語力の低さです。何気ない買い物の場面でも他の人に頼らないと厳しいことが多く情けなく思いました。今後の経営でも英語に触れる機会は多くなると思うので、改善していきたいと思いました。

オーストラリアの印象としては、自然豊かで料理も美味しくとても過ごしやすい国だと思いました。特に、タスマニアは北海道に近い印象で大きい都市（メルボルン）も近く、住むなら一番良さそうだと個人的には感じました。オーストラリアはイギリスの植民地だったこともあり、料理については少し不安だったのですが、予想以上に美味しいものばかりで驚かされました。また、時期的にオーストラリアは初夏ということでもっと暑いと思っていたのですが、丁度雨が多く、そこまで厳しい暑さではなかったです。本来あまり雨の降る土地ではないとのことなので、ある意味貴重な体験ができたのかなと思います。

農業視察については、乾燥が多い地域ということで灌漑設備がかなりしっかりしており、視察先のチェリーヒル（種馬铃薯貯蔵・管理会社）と契約するための必須条件にもなっているそうです。また、酪畜も盛んで放牧されている牛や羊が移動中何度も見られました。

全体を通して楽しく有意義な研修になったと思います。今後は今回の研修での経験を生かしてより良い農業経営、青年部活動をしていけたらと思います。ま

た、今後もう一度オーストラリアに研修に行ける機会があれば、今回行けなかった西部方面で小麦のほ場や作業風景なども見てみたいと思いました。

最後に、今回の海外視察研修の日程調整など多くのご協力をいただいた農協観光ならびにＪＡめむろをはじめ関係機関の方々に心からの感謝を申し上げ報告を終えたいと思います。

海外農業視察研修を終えて

山口 祐佳

この度、海外農業視察研修に参加させていただき、J A めむろ並びに芽室町役場をはじめとする各関係機関の皆様に心よりお礼申し上げます。

羽田空港から 10 時間かけてメルボルン空港に到着し、夏のクリスマスツリーが真っ先に目に入り、オーストラリアに着いたと実感しました。その後、タスマニアのデボンポートに向かい車窓から見える広大な畑には除虫菊という白い花が広がっていました。この除虫菊には、殺虫効果があり殺虫剤の成分として使われているそうです。また、オーストラリアでは母の



日やお見舞いにも白い菊を送ると聞いて日本人の感覚では、あり得ないことだとびっくりしました。

翌日、最初に種馬铃薯保存管理会社であるチェリーヒル・クールストアの視察をおこないました。ここでは、事前に種馬铃薯をカットするプレカットと日本でも用いられているスプリングカットの 2 通りの手法で種馬铃薯を管理しており、スプリングカットに比べプレカットには多くの利点があることが分かりました。この視察では、有限な種馬铃薯資源の最大化を実現していると思いました。また、カットする機械を分解して 3 か月かけて掃除することに驚きました。

次に、年間 20,000 t の馬铃薯を収穫し北西部を代表する農家であるグレン・カー農場を視察しました。この農場では、グリメハーベスターを 4 機所有していることや OVERSIZE と書かれたトラクターなどの大型機械、さらには広大な畑を目の当たりにし、大規模農業であることを実感しました。視察後には、ビールやミートパイなど沢山のおもてなしをしていただき、陽気な奥様を囲んで楽しい時間となりました。

メルボルンでは、NPO 団体セレスの視察をおこないました。元々この場所は、ごみの埋め立て地であった場所を地域の人々が改善し、地域に根差した持続可能な暮らしを目指している施設です。オーガニック野菜を使ったカフェやマー

ケット、週末には子供向けのイベントもあり家族連れで賑わっているようです。この視察では、サステナブルな社会を意識して取り組むことにより環境を壊さずにより良い状態で次世代につないでいけるということを考えさせられました。

シドニーでは、市内を観光することができ、オペラハウスやセント・メアリー大聖堂など伝統的な建物がとても素敵でした。また、日本にはない環境や文化も感じることができました。この研修で共に参加した皆様と有意義な時間を過ごせた事を大変嬉しく思っています。ありがとうございました。

海外農業視察研修を終えて

奥野 早苗

およそ 25 年ぶりの海外、しかもフライト時間が 10 時間と、出発前から不安がありました。オーストラリアに入国、タスマニア島に向かう機窓からは緑・茶色と動物らしき点々が見え、これから始まる研修にワクワクしました。馬鈴薯、人参、小麦、けし（鎮痛剤）、除虫菊（蚊取り線香）、ビニールハウスでのトマト栽培の畑作と、白い肉牛や羊も道中見ることが出来ました。



種馬鈴薯貯蔵施設 Cherry Hill Coolstore では、加工業者のシンプロットの発注に基づき選別、カット、薬剤塗布し、6 か月の徹底管理のもと農家に引き渡すそうです。グレン・カー氏の農場を視察しました。少雨のため 1 年に 9～14 回の灌漑、牛は 300 頭飼育、グリメハーベスターは地域で最も早く 4 台（1 台は自走式）所有され 7,000 t が加工向け、3,000 t の種馬鈴薯を生産しています。ここまでを妻のジャミン氏と共に説明され、倉庫の中でおやつをとビール・チーズ・ハム・サラミ・クラッカー が出てきた時「外国だわ～」と感じました。

メルボルンに移動し、クイーンビクトリアマーケットでは新鮮なフルーツ・野菜・ハム・チーズ・肉などに驚き土産物、衣料、雑貨など買い物も楽しめました。1936 年完成の聖パトリック教会では荘厳な雰囲気圧迫され、夜には人生初のカジノへ立ち寄り 貴重な体験になりました。CERES はオーガニックにこだわり、野菜の生産、ショップ、カフェ。建物や敷料にも木を使い、コンポストによる堆肥作りなどサステナブルな取組をしている NPO 法人でした。ヤラバレーの Rochford ワイナリーでは ワインの試飲をし、好みのワインを発見。帰りにみんなの背中にハエが異常についていたのが笑えました。

シドニーでは やっと天気も良くなり念願だったオペラハウスやコアラを見ることができ大満足でした。

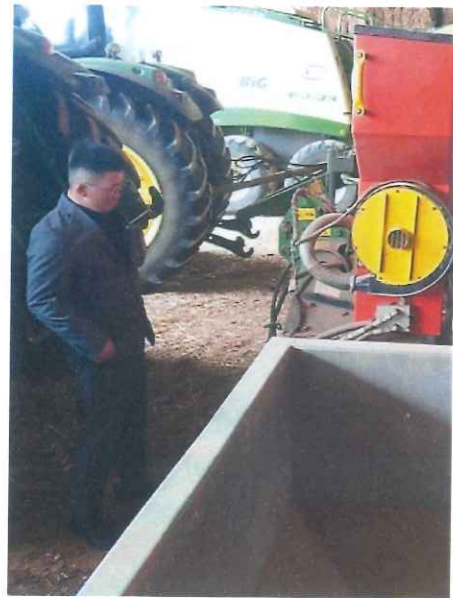
最後にこの研修で楽しい思い出を共有できた青年部・女性部の皆さん、お世話になりました。この研修を支援してくださった関係機関、家で一人待っていてくれた家族に感謝します。ありがとうございました。

海外視察研修レポート

久保 春樹

まず初めに、第22回JAめむろ青年部・女性部海外視察研修に参加させていただくに当たり、多くのご理解とご協力をいただいたJAめむろ並びに芽室町役場を始めとする各関係機関の皆様にご心から感謝申し上げます。

海外視察研修に参加させていただいた理由として、自分の足ではなかなか行く機会のない海外という日本より遥かに大規模な農業を営んでいる土地でどのような作付けや作業体系をしているのか、また農業に関する考え方に違いがあるのかなどを見て、聞いて、感じて、今後自分が経営者となり農業を営んでいくうえでの貴重な経験としたいと思ったからです。また、農業に限らず日本とは違う文化や風習に触れ自身の視野、見分を広げ自らの成長にも繋げていきたいと思いました。



視察先のオーストラリアは干ばつ地域で時期によっては雨が降らないことも多く、水不足を少しでも解消するために各農家が自分の畑に貯水池を作り、そこに雨水を溜めて畑に設置してある巨大な散水機で水をかけて土壌が乾かないようにする仕組みを作っていました。作付けされている物を見ても、小麦や馬鈴薯、人参などの芽室でも見かける作物から除虫菊という殺虫剤に使われているピレトリンの原料になる菊の栽培もされていました。

種馬鈴薯貯蔵施設の Cherry Hill Collstore では、馬鈴薯の種馬鈴薯を選別、管理していてサイズ毎に分けて規格より大きい物は加工品になり、小さい物は家畜の餌になるといった規格漏れがあっても生産者にロスのないように取り組んでいました。選別とカットを済ませ芽出しをおこない、生産者が蒔きつけをする当日または前日まで種管理をして生産者に受け渡しをすると聞きました。また、受け渡しする際にコンテナ毎にタグがついていて、万が一ほ場で病害が発生した場合などに出荷先を遡り問題解決に取り組めるようになっていました。

グレン・カー農場では農業に取り組み方や自身が農業を引退する時のやり方を聞きました。その中で印象に残っているのは、後継者に対する考え方で、日本の農業は世代交代で子供が親から土地や機械を受け継いで経営していくのに対し、オーストラリアでは農業を引き継ぐとなったら自身の子に畑や機械を貸して子供がその畑で得た利益を資金に親から畑を買っていくやり方が多く、やりたい人がいない場合は畑を増やしたい人に貸して地主として収入を得て生活すると聞きました。

今回の海外研修を通して自分がおこなっている農業のやり方、考え方や農業を支える企業の取り組み方は世界視野という点ではほんの一部に過ぎず、国や地域でこんなにも考え方が変わるのだなと実感しました。今後自分が経営主として農業をしていく時も、視野を広げ色々な方向から物事を捉え柔軟な対応をしていきたいと思います。

海外研修を終えて

口田 諒

今回11月25日から12月2日まで7泊8日の日程でオーストラリアへ海外視察研修をしてきました。僕が参加した理由として、日本と海外でどれだけの差ができているか、どこまで徹底的に詰めて物事に取り組んでいるのか、歴史にはどんな背景があるのかが気になったので参加をさせていただきました。

自分自身初めての海外で緊張ばかりだったのですが、周りの方々にサポートしてもらいながら楽しく研修することができたのでとても良かったです。

現地についてから色々なお話をたくさん聞きました。その中でも印象的だったのは種馬铃薯貯蔵庫でした。種馬铃薯を徹底的に管理して、地域の人々でいいものを作るぞ！という協力性など、日本ではあまり見られないやり方をしておりすごく興味深かったです。ここから日本と差が出始めてきていることなのかなと感じ、あまりにもやり方が自分の中ですごく、いつかこのようなことが日本でもできたら嬉しいなって思っています。基本的に海外の人はオープンな人が多いので、自分がどのようにしたらこれだけ収量が上がるよとか色々な情報をみんなで共有していたので、そこも良いところなのかなと思いました。

その他にも、経営移譲の話を聞いたところ、まるっきり畑を全部渡すのではなく、親から少し畑を買ってそこから経営を始めて少しずつ大きくしていき、やがて親が持っている畑を全て買うっていうやり方をやっており、日本との違いに少し戸惑いました。だけど、それも一つのやり方としてすごく面白く興味深いものになりました。

その他にも、たくさん研修先に行きましたが自分の中ですごく思うことは、やはり日本遅れているなってことです。日本は一つのことに對して曖昧だったり中途半端になってしまったり、全力で取り組めてなかったりいきなり大きく事業を始めてしまったりということが多く、まず初めに小さなことからでいいと



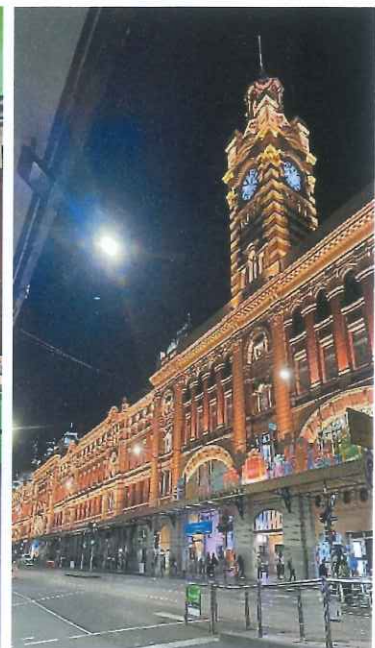
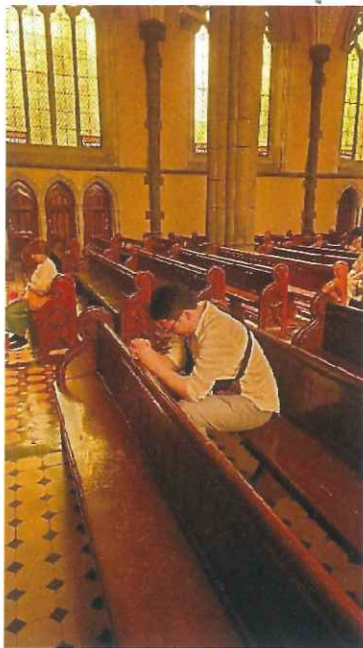
思うので、何か全力で取り組めるものを一つ始めることが大切だと思います。それは農業に限らずだと思います。何か思うことがあるなら素直に伝えて、オープンに話をできる関係性を作れるような雰囲気作りだったり、そういうことも大切なことなのではなかったりしました。そのため、自分も出来るだけいい物作りをこの芽室町でしていきたいと強く思ったので、自分から何かを提案したり積極的に話し合いをしたりして、より品質のいい野菜類をこの芽室町に限らず全国各地にお届けできるような生産者となっていきたいと思います。

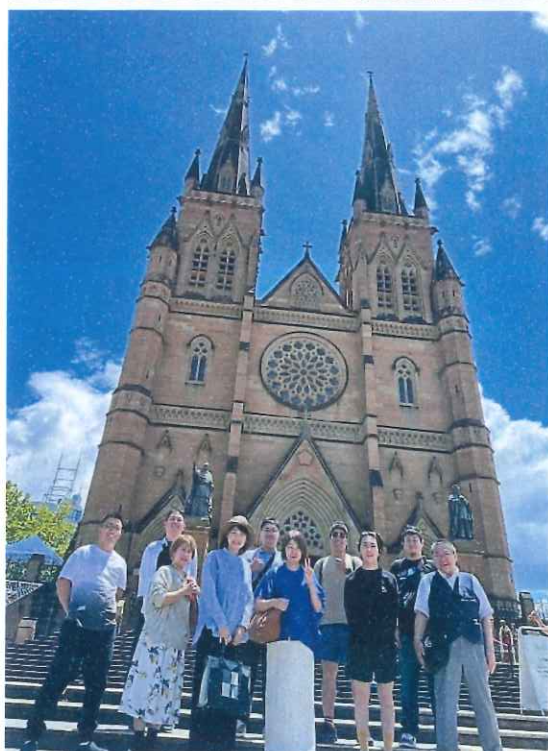
最後にこの研修をきっかけにより良いものづくりをできるように今後活かしていきたいと思います。一緒に研修を共にしてくださった皆様本当にありがとうございました。

旅を終えて











～編集後記～

今回の青年部・女性部海外視察研修は8日間という短い期間ではありましたが、とても実りある楽しいものになりました。南半球という季節が真逆の地で、様々な人たちが生活している空間は、日本ではなかなか味わえない貴重な体験でした。今回の研修で得た経験や知識、考え方は今後私たちが農業を経営していく際に役に立つものになると思います。また、今回の研修で一緒に視察に参加した人たちが今後も交流を続けていくことで、さらに農業生活を豊かにしていきたいと思います。

今後海外視察研修に参加を考えている盟友や参加を迷っている盟友には、今回の私たちの報告を通じて、少しでも参加に興味を持っていただけたら幸いです。なかなか海外の農業を見に行くことはないと思うので、タイミングが合えばぜひ参加して、知識、経験を深めていただければと思います。

この報告書を作成するにあたり、研修に参加された団員の皆様および事務局の方々には大変お世話になりました。12月帰国ということもあり、年末年始の忙しい時期にも関わらず、多数の手助けをいただき誠にありがとうございます。そして、今回の海外視察研修をおこなうにあたり、JAめむろをはじめ、青年部・女性部、農協観光や現地ガイドの方々など多くの関係機関様にご協力いただいたことをこの場をお借りしてお礼申し上げます。この度は本当にありがとうございました。

以上を持ちまして、海外視察研修の報告とさせていただきます。

